

Museum Collection Exhibition

The Power of Pattern:
Hand in Hand with Technique

企画展

文様のちから

技法に託す

根津美術館
NEZUMUSEUM



2022年1月8日(土)～2月13日(日)

日時指定予約制

根津美術館 NEZU MUSEUM <https://www.nezu-muse.or.jp>

果てしなく続く縞文様や格子文様、一定のリズムで繰り返される唐草文様、幸福への願いが込められた吉祥文様：工芸品に施される文様は作品の外形と調和して、得も言われぬ魅力を醸し出します。

作り手は、文様をあらわすために最も適した技法を考案し選択する一方で、技法の特性を生かした文様表現を追求してきました。技法と文様は生み出し、生み出される相対関係にありながら、しかも一体となって作品世界を作り上げる、いわば「相即不離」の関係にあるといえるでしょう。

本展は、文様と技法それぞれの立場から両者の関係に迫ろうとするものです。第1章では、「文様から技法を探る」として、能装束や現在のきものの原形である小袖をもとに、文様と技法の間にごのような関係が見いだせるのかを探ります。また、当時の服飾の流行を反映した「誰が袖屏風」を、描かれたきものの文様と技法の観点から読み解きます。第2章は、「技法から文様を探る」としました。同じモチーフをあらわすために、陶磁器、漆工品、金工品では技法にどのような違いが見られるでしょうか。ここでは、描く、彫る、鋳るなど、技法の核となる行為に着目して技法の特徴を明らかにします。

本展は、当館では2010年の新創記念特別展以来となる、染織品を主要なテーマとした展覧会です。文様と技法が一体となって作り上げる作品世界をお楽しみください。

第1章 文様から技法を探る



ちやじたてわくゆきもちまつもようぬいはく
茶地立涌雪持松模様縫箔
1領 絹
日本・桃山～江戸時代 17世紀
根津美術館蔵

立ち上る蒸気のような立涌文の上に雪を冠した老松を刺繍であらわした縫箔。雪持松は、一見、規則正しく並んでいるように見えるが、単なる繰り返し文様ではなく幹に沿ってバランスよく置かれている。動きに満ちた自由な配置は刺繍ならではの表現。



べにあさぎだんかごめそうかもようからおり
紅浅葱段目草花模様唐織
1領 絹
日本・江戸時代 19世紀
根津美術館蔵

籠目文様を地文とし、その上に胡蝶の舞う秋草を織り出した重層的な文様構成の唐織。固定的な繰り返し文様が、赤色と浅葱色（薄い藍色）に染め分けられた段替わりの地の上に置かれることで、変化に富んだものに感じられる。



うすあさぎじやりうめつるかめもようひたたれ
薄浅葱地檜梅鶴亀模様直垂
1領 麻
日本・江戸時代 19世紀
根津美術館蔵

晴れわたる空を思わせる浅葱色の地に、檜梅と呼ばれる直線的な枝の梅と鶴亀を染め出したさまは、まるで一幅の絵画のよう。糊防染で模様の概略を染め出した上に、筆や刷毛を用いて輪郭線や彩色を施したものと考えられる。

【このページの染織品に用いられている技法について】

- ・唐織：横糸に色糸を用い、多彩な文様を縫取織の技法であらわした織物またはその技法。能では女役の装束としてよく用いられ、装束名にも転化した。
- ・縫取織：文様部分のみに色糸を往復させて文様をあらわす技法。刺繍のような立体感のある風合いが特徴。
- ・摺箔：型紙を用いて文様の形に糊を置き、その上に金銀箔を置いて文様をあらわす技法。刺繍（縫）と組み合わせたものを「縫箔」と呼ぶ。
- ・糊防染：染色技法の一種。何らかの方法で布の一部に染料が浸透しない箇所を作ることによって模様をあらわす技法を防染模様染と言ひ、糊防染では防染剤にもち米などを原材料とする糊を用いる。



たそでずびようぶ
誰が袖図屏風
6曲1双 紙本金地着色
日本・江戸時代 17世紀
根津美術館蔵



当世風の衣装を掛けた衣箱のある部屋の様子を描いた屏風。実際の衣装を写したかのような描写は、技法が特定できるほどリアルである。

第2章 技法から文様を探る



うんりゅうついしゅぼん
雲龍堆朱盆
1枚 木胎漆塗
中国・明時代 万曆17年(1589)
根津美術館蔵

堆朱は漆を塗り重ねた層を彫って文様をあらわす技法の一種。最上層の龍文から最下層の地文まで精緻に彫り出すことで生まれる立体感は迫力に満ちている。



うんりゅうはっかきょう
雲龍八花鏡
1面 青銅鑄製
中国・唐時代 8世紀
根津美術館蔵
村上英二氏寄贈

ちゅう
鈕に向かって大きく口を開き、体をくねらせた龍を内区全面にあらわした雲龍鏡。細かい鱗などに見られる柔らかな表現は鑄造ならではの。



せいかりゅうほうおうもん めいびん
青花龍鳳凰文梅瓶 景德鎮窯
1口
中国・元時代 14世紀
根津美術館蔵

つややかな白磁の上に鮮やかなコバルトで龍や鳳凰などをあらわした梅瓶。細い絵筆で伸びやかに文様を描く手法は、それまでの陶磁器の様相を一変させた。

【この展覧会での「文様」と「模様」について】

工芸品などにあらわされる図形をいう時、「文様」と「模様」のどちらの言葉も使われます。辞典類をひもとくと、これら2つの語の間には、用いられ方に習慣的な差はあっても、大きな意味の違いはありません。

この展覧会では両方の語を使用しています。展覧会タイトルにも使っている「文様」には、デザインを構成する最小単位である<モチーフ>、そしてモチーフが複数連なって形作られる<パターン>の2つをあわせた意味を持たせています。一方、作品名称に用いている「模様」は作品全体の図様を表しています。

同時開催展

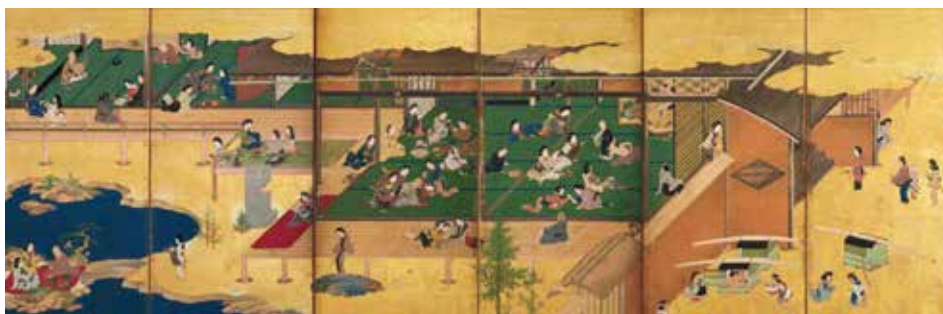
展示室5 ひやくちんず 百椿図 一初公開の「邸内遊楽図」とともに—

新春恒例の「百椿図」の展示。このたびは、同じく江戸時代前期に制作された「邸内遊楽図屏風」のお披露目をかねます。

ひやくちんず
百椿図(部分) 伝 狩野山楽筆
2巻 紙本着色
日本・江戸時代 17世紀
根津美術館蔵 茂木克己氏寄贈



江戸初期の園芸椿ブームを背景に制作された作品。さまざまな器物との組み合わせ、また和歌や漢詩が書き添えられる点に特徴がある。



ていないゆうらくず びょうぶ
邸内遊楽図屏風
6曲1隻 紙本金地着色
日本・江戸時代 17世紀
根津美術館蔵

わかしゅうぢや
若衆茶屋の情景を精細に描きだした優品。現状は、三十六歌仙の和歌を書いた短冊を貼り交ぜた、時代の異なる屏風と一双をなす。修理を経て、初公開。

同時開催展

展示室 6 ちやのゆはじめ 茶湯始—新年を祝う—

年始に初めて催す茶の湯は、古くは「茶湯始」と称されていました。新しい年の訪れを祝って、吉祥の茶道具を取り合わせます。

しよんぞいしやうちくいもんみずさし
祥瑞松竹梅文水指
景德鎮窯 1口
中国・明時代 17世紀
根津美術館蔵



中国・明時代末期に日本向けに生産された祥瑞は華やかな吉祥文様が特色。本水指も松竹梅やつが番いの鳥など縁起の良い文様で埋め尽くされている。

開催概要

展覧会名 企画展「もんよう文様のちから—ぎほう たく技法に託す—」

日時指定予約制

ご来館前に当館ホームページより日時指定入館券をご購入ください。
(根津倶楽部会員、招待はがきをお持ちで入館無料の方も予約が必要です。)

主催 根津美術館

開催期間 2022年1月8日〔土〕～2月13日〔日〕

開館時間 午前10時～午後5時(入館は閉館30分前まで)

休館日 1月10日を除く毎週月曜日、1月11日(火)

入館料 オンライン日時指定予約 一般 1300円(1100円) 学生 1000円(800円)

※()内は障害者手帳提示者及び同伴者1名の料金。中学生以下は無料。

※オンライン日時指定予約の定員に空きがある場合のみ、当日券(一般1400円)を美術館受付で販売いたします。

※2022年1月5日(水)より当館ホームページで予約を受け付けます。

アクセス 地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線〈表参道〉駅下車A5出口(階段)より徒歩8分、
B4出口(階段とエスカレーター)より徒歩10分、B3出口(エレベーターまたはエスカレーター)より徒歩10分

住所 〒107-0062 東京都港区南青山6-5-1

お問合せ Tel. 03-3400-2536(代表)
website <https://www.nezu-muse.or.jp>

当館の広報制作物に関して、郵送からメール配信への切り替えをご希望の方は、根津美術館 広報課へ
どうぞお知らせください。(press@nezu-muse.or.jp)

次回展

企画展「かたちのチカラ—素材で魅せる—」

2022年2月26日(土)～3月31日(木)



文様のない器物は、ダイレクトに素材・デザインの力を感じさせます。その魅力を、漆工品を中心に歴史と共にご紹介します。

左: 春日盆 日本・桃山時代 16世紀

右: 白磁浄瓶 中国・唐時代 8世紀 藤崎隆三氏寄贈
いずれも根津美術館蔵

*本資料掲載の内容は、予告なく変更になる場合がございます。最新の情報は当館広報課へお問い合わせください。(2021.10.)